

北陸学院短大の保健室利用状況の実態報告と課題

— 過去3年間の来室記録より —

An Investigation into the Circumstances of Students who Use the School
Nurse's Office at Hokuriku Gakuin Junior College
— From the Record of Office Usage of the Past Three Years —

道 下 千 春

要旨

本学における保健室の利用状況を学生の記載した来室記録をもとに実態調査をした。今まで利用状況を知るため、それを集計し利用数を算出するだけに終わっていた。しかし、この数値の中には多くの要素が含まれ、分析することによって、学生の心身の健康状態やニーズを知る重要な材料となる。そこで3年間に来室した学生1,722名を学年別、月別、症状別、処置別などに分けて分析してみた。その結果、利用率40.6%、1年生が2年生より多いこと、傷病は春に多いことなど他の大学と傾向が似ていることもあれば、本学のような女子短大の特徴といえる要素が症状別の分析で明らかになった。それらの結果を踏まえ、2年間の短大生活を安全にかつ健康に過ごすための一助として、保健室の運営を考える指標に活用できることを期待する。

1. はじめに

本学が三小牛に移転したのは1967年(昭和42)であり、この三小牛キャンパスの保健室も40年の歴史がある。しかし、当初の保健室の記録は何も残されておらず、保健室がどのように機能していたか実態を知ることとはできない。近年、学生の心と体の健康問題が多様化し健康支援は重要な役割を担っている。しかし一方では、少子化による厳しい学校経営の影響をどこの保健管理担当者も受けているといわれている。私立大学の場合、大規模大学では保健管理業務の充実を図りスタッフを増やし「保健センター」となる大学もある¹⁾。今回の調査はこういう時代の煽りを受けながらも、本学における保健室利用の実態に焦点をあて、保健室の現状を知るとともに、他の短大との比較と若干の考察を加え今後の課題を含め、健康管理の改善と充実を図るための基礎資料を得ることを目的とする。調査は平成15年度から平成17年度の3年間にわたる保健室利用学生を対象として、保健室来室記録^{註1)}から年度ごとの利用者を集計し、その主訴内容について利用学生数を年度別、月別に分析したものである。

2. 調査方法

平成15年度から平成17年度までの3年間に保健室を利用した学生数1,722名を対象とする。

- 1) 年度別利用学生数
- 2) 月別利用学生数 (4月から3月)
- 3) 症状から見る年度別利用学生数
- 4) 3) の中から利用の多いものを取り上げ症状から見る月別利用学生数
- 5) 処置別からみる保健室の対応

以上から本学の保健室の利用学生数と主訴内容を単純集計による分析で試みた。

3. 調査結果および考察

1) 年度別利用学生数

表1は延べ利用学生数と実利用学生数を年度別、学年別で表したものである。3年間における延べ利用学生数は1,722で年平均延べ利用学生数は574であった。また利用実人数は863名で年平均利用率は40.6%、全学生の4割が利用している。しかし図1で平成17年度の利用率はかなり減少していることが分かる。図2は利用学生の利用頻度を表したもので、「2回以上利用している」が45%を占め、一度保健室を利用すると何回も利用する学生が多いことがわかる。また、学年別に利用率をみると、年度平均は1年生45.4%、2年生35.8%を示し、どの年度でも1年生の利用者の割合が多い傾向がみられる。これらの結果は他の短大でも同じような結果が得られている^{3) 4)}。

平成17年度の利用率が減少した要因の一つに、保健担当者が兼務のため保健室を閉室した時間が多かったことが考えられる。保健室には常に応急処置や相談できる職員がいるという信頼感・安心感が重要なのではないだろうか。また、1年生が2年生を上回っている背景には大学生活に不慣れであること、健康についても問題解決の方法に疎いこと、人間関係ができておらず、相談する相手が少ないことなどがあげられる⁴⁾。特に1年生の前期には色々な面で不安定になっているため周りからのサポートが必要であると考ええる。

2) 月別利用学生数 (4月から3月)

保健室の年平均月別利用状況 (図3) によると、6月が99件と最も多く、次に多いのは5月の84件、4月と10月の81件である。6月に多いという傾向は他の短大でもみられ、その要因は、入学や進級と新しい環境に少し慣れ緊張感が緩み、体調を崩したり不注意なけがにつながる⁴⁾とし、加えて学校の体育的行事や課外活動が活発となる時期であること、北陸の気候から寒暖の差、日照時間、湿気なども影響し傷病が増加すると思われる。また、季節別にいいかえると5月、6月、10月の春と秋に多いという傾向が見られる。これも他短大の調査報告と一致している³⁾。月の途中からはじまる4月や1月、休暇にはいる7月などは学生登校日数が少ないことから利用も少なくなっていると考えられる。

北陸学院短大の保健室利用状況の実態報告と課題

表1 年度別利用学生数

年度	平成15年度		平成16年度		平成17年度		15-17
在籍学生数	744		680		704		2128
学年	1年	2年	1年	2年	1年	2年	全体
在籍学生数(学年)	356	388	338	342	377	327	2128
利用延べ人数	337	299	325	270	296	195	1722
利用実人数	166	144	169	119	149	116	863
利用率	46.6%	37.1%	50.0%	34.8%	39.5%	35.5%	40.6%

図1 年度別利用状況と利用率

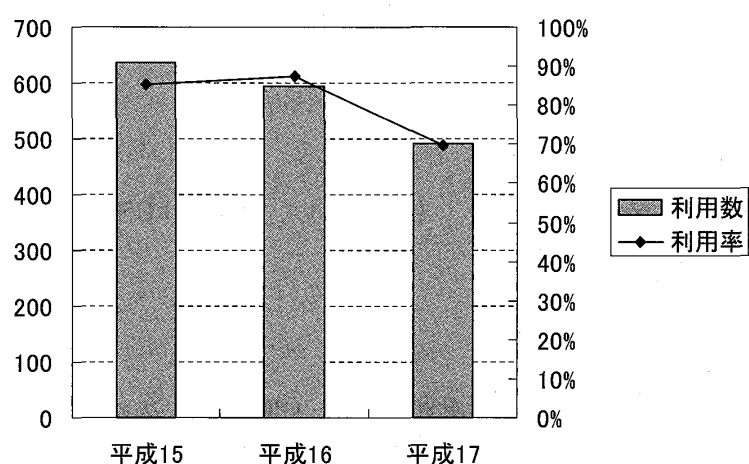


図2 来室頻度

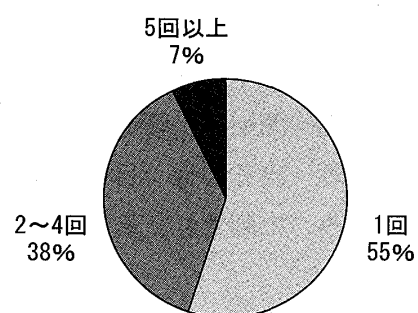
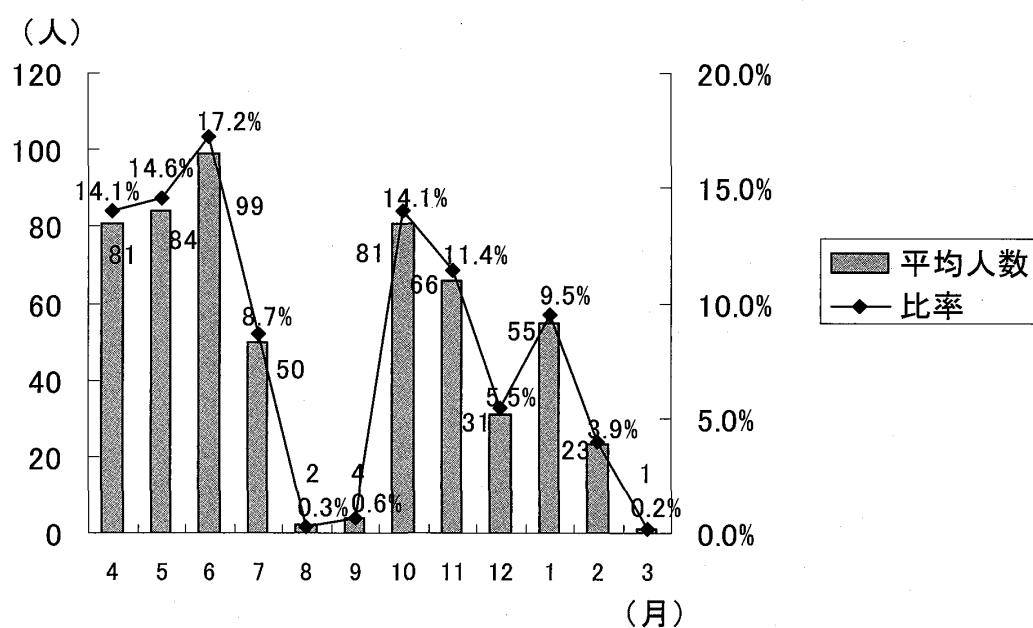


図3 年平均月別利用状況 (15-17)



3) 症状からみる年度別利用学生数

表2の症状別分類は平成15年度全国大学保健管理協会^{注2)}第27回北陸地区保健・看護師班研究会(現、保健管理担当職研究集会)での検討資料^{注3)}を参考に、また学生が記載する症状と合わせ、本学に見合ったものを独自に作成したものである。

各分類の具体的な症状は

- ・風邪様症状：のどが痛い、咳がでる、寒気がする、熱がある 鼻炎症状(鼻水、鼻づまり)
- ・消化器症状：胃痛、胃もたれ、腹痛、下痢、便秘、吐き気
- ・頭痛：風邪症状を伴わない頭痛、偏頭痛
- ・生理痛：月経による下腹部痛、腰痛、気分不快
- ・内科その他：めまい、貧血、倦怠感、不眠
- ・創傷：切傷、刺傷、擦り傷、熱傷、靴ずれ、とげ、ピアストラブル、爪損傷
- ・打撲・捻挫：打撲、捻挫、突き指
- ・筋肉痛・関節痛：腰痛、肩こり、筋肉痛
- ・眼・耳・皮その他：目の充血、異物(コンタクトレンズ)、ものもらい、歯痛、口内炎、湿疹、かゆみ、虫刺され、鼻出血

とした。

図4で3年間の全件を症状別にみると、最も多い症状は「風邪様症状」(20%)で、次に「生理痛」(19.3%)、「創傷」(15.4%)、「消化器症状」(14.8%)である。しかし外傷(創傷15.4%、打撲・捻挫6%)とみた場合は21%となり一番多いということになる。図5で年度別で多い(100件以上)症状は平成15年度と16年度の「風邪様症状」、平成15年度の「消化器症状」、平成15年から17年度の「生理痛」、平成16年度の「創傷」である。その要因は明らかにはできないが、特に多い平成15年度の「風邪様症状」の具体的な症状をみると、春から夏にかけては、のどの痛みや鼻炎症状が多く、秋以降は発熱、寒気、頭痛などが多かった。平成16年度の「創傷」については、図6に示すように外傷の種類別でみてもすべてで他の年度より多い。とりわけ多かったのは「靴擦れ」や「爪・ピアストラブル」によるものであった。また「生理痛」は図5からもわかるように、どの年度も多く年度の差異はほとんどない。これらのことは女子学生の特徴といえる。

図4 症状別利用件数 (15-17)

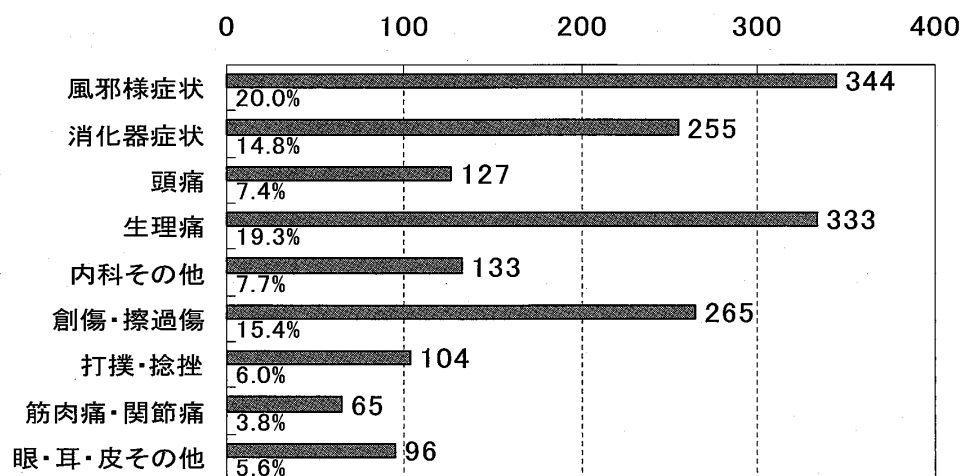


図5 症状からみる年度別利用件数

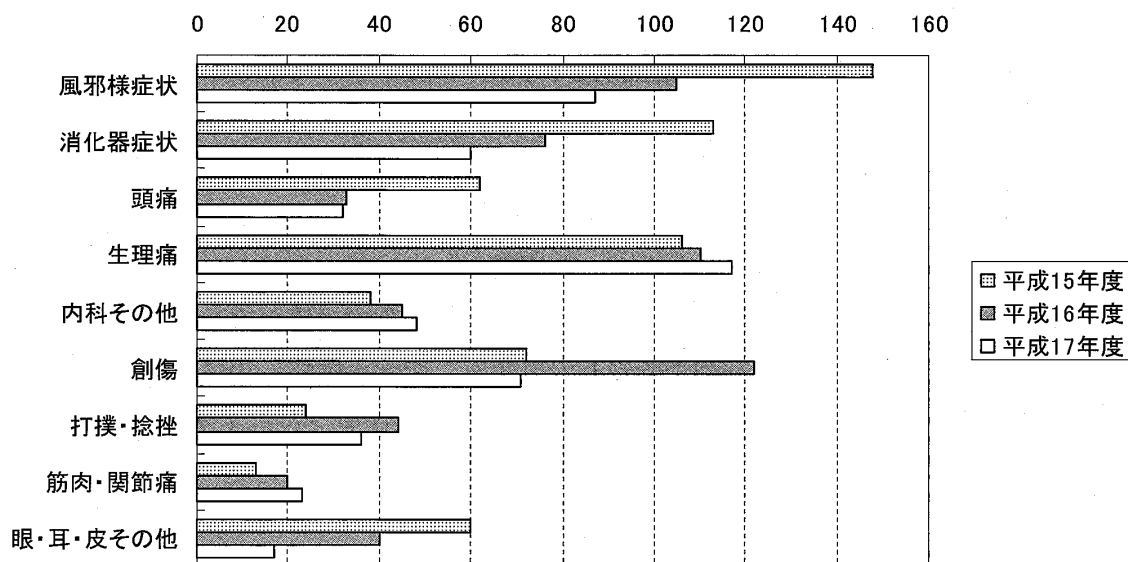
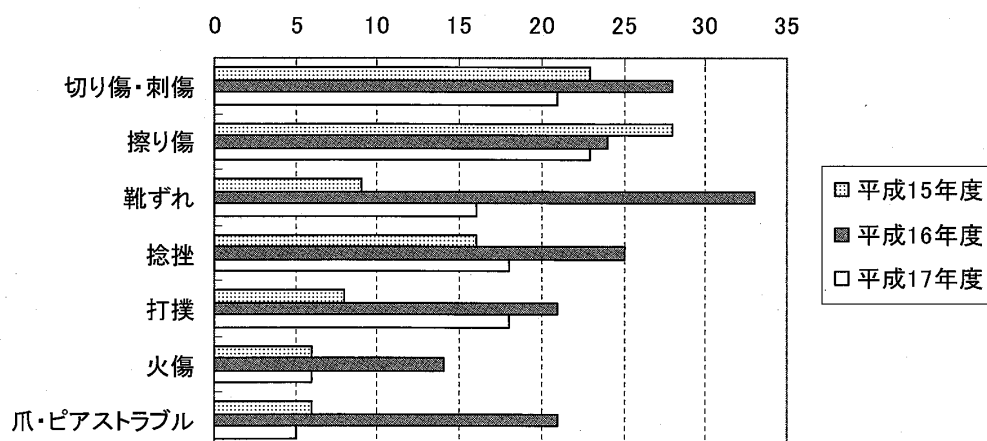


図6 外傷の種類別件数



4) 3) の中から利用の多いものを取り上げ症状からみる月別利用学生数

図4で割合の多かった4つの症状について月別にみたものが図7である。どの症状のパターンもほぼ類似していて、15%以上を示す月をみると「風邪様症状」は4月と10月、「生理痛」は6月、「消化器症状」は6月、「外傷」は5月と6月となっている。「風邪様症状」についてみるとインフルエンザの流行る1月から2月にかけての頃は比率が高くなるのは当然といえるが、それ以上に4月と10月が高くなっている。それらは、新学期の新しい環境への適応過程を示す現象と考えられる。言い換えると休み明けで生活リズムが変わり、体調を崩しやすく風邪を引くことが考えられる。また、本学の位置は丘陵地にあり平地より2度ほど平均気温が低い、にもかかわらず4月の学生の服装は薄着であることも要因のひとつになるのではないだろうか。「生理痛」については、不確かではあるが当月の登校日数に比例していると思われる。「消化器症状」については他の月に比べ6月が多い。この傾向は他の短大の報告書とも一致し、これらの原因として、生活の不規則(食べすぎ、寝不足など)や精神的ストレスが考えられている⁴⁾。次に「外傷」については、表2にその種類を月別に示した。多い月は6月(76件)、5月(66件)、10月(51件)、4月(50件)の順で、年度初めの3か月で全体の半数以上を占めている。春に外傷の多いことは他の短大とも一致している。群馬大学学生の外傷の実態調査でも季節は春が多いとあるが、異なる報告も少ないとしている。また受傷の原因については本人の不注意と不可抗力で9割を占めるが、受傷の過半数はスポーツに由来するとある⁵⁾。しかし本学は女子短大のためか体育授業でつき指や捻挫はあっても件数としては少ない。むしろ「靴ずれ」(15.7%)と「爪損傷、ピアストラブル」(8.7%)で外傷全体の4分の1を示していることから、お洒落をしたい短大生にとってヒールの高い幅の狭い靴や、長い爪やピアスはかなり外傷のリスクを高めているのは確かである。主な発生状況を表3に示した。来室記録内からは詳細不明のものも多く、やや正確性にかけるが主なものは示す通りである。階段からの転倒も確実なものを拾い上げると7件あった。平成16年度8月に本館階段の滑り止め工事をしてからは、そのうちの1件と減少している。

5) 処置別からみる保健室の対応

図8で処置別件数をみると、投薬がどの年度も多くなっている。年平均で約231人の学生が保健室で薬を受け取り内服している。保健室では内服薬として市販の総合感冒薬、解熱鎮痛剤、胃腸薬などが常備されている。投薬時にはアレルギーの有無、内服既往の有無、食事摂取状況や現在服薬中の薬剤の有無等を確認し与薬をおこなっている。学生からはもっと薬の種類を増やしてほしいとの要望があるが、保健室での投薬には限界があること、副作用の少ない一般的な内服薬しかだせないことなど説明している。次に多いのは休養だが、投薬や応急処置を伴わない休養のみの場合に限定して集計してあるため実際の数値はもっと高い。ベッド使用の休養は発熱や頭痛・生理痛の強い時などに許可している。中には明らかに二日酔いや夜遊びでの不眠とわかる学生もあり、断固ベッドの使用は許さず、ソファでごろ寝しているケースもある。いずれにしても30分以上の睡眠は夜間の睡眠サイクルを狂わすとも言われているため、30分後には声をかけ症状が改善しないようならば帰宅や病院受診を勧めている。「その他」の中には保健室対応は難しく、病院への搬送が6件入っている。

保健室は時間に関係なく利用されているが、学生の利用数を時間帯別に図10で表すと、一番多いのは10時から11時の時間帯で21%、次は12時から13時で17%であった。要するに本学での礼拝時間前後、昼休み時間帯に多く利用しているのがわかる。時間帯によって症状や利用目的も変わると思うが、そこまでの検証には至っていない。

図7 月別利用率

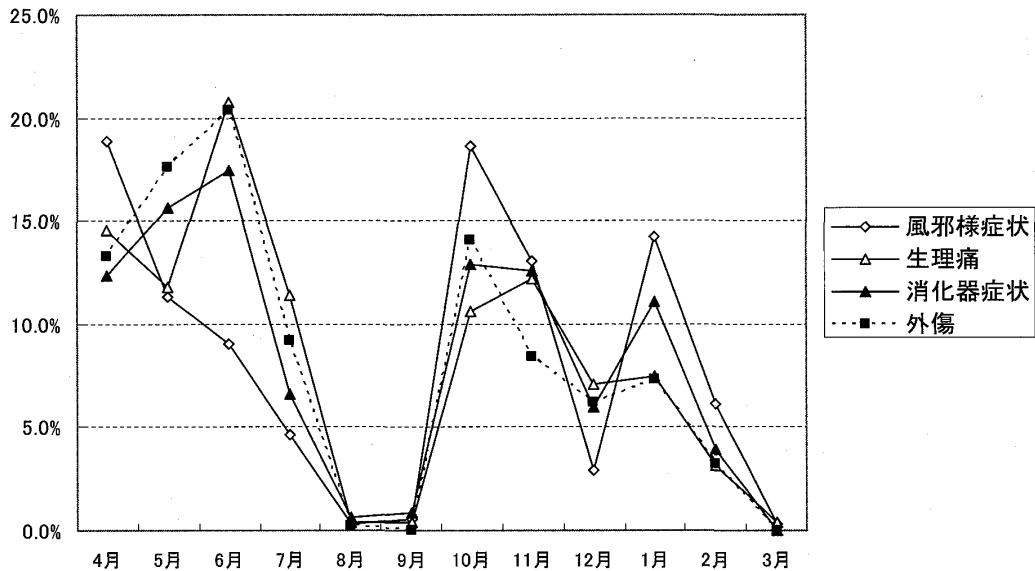


表2 外傷の種類と件数

内訳\月	4	5	6	7	8	10	11	12	1	2	計	
切り傷・刺傷	10	19	11	6	0	9	5	4	7	1	72	19.5%
擦り傷	16	16	7	10	0	10	4	2	8	2	75	20.3%
靴ずれ	8	9	15	7	0	10	5	1	2	1	58	15.7%
捻挫	5	7	16	2	0	8	9	6	5	1	59	16.0%
打撲	4	10	14	1	1	5	1	3	3	5	47	12.7%
熱傷	0	3	4	4	0	4	5	3	1	2	26	7.0%
爪損傷・ピアストラブル	7	2	9	2	0	5	2	3	2	0	32	8.7%
計	50	66	76	32	1	51	31	22	28	12	369	100%

道 下 千 春

表3 外傷の発生状況

登校・下校・移動時	授業・部活動中	その他
<ul style="list-style-type: none"> ・登校中駅の階段で転倒 ・駐車場で転倒 ・車のドアに手を挟む ・自転車走行中転倒 ・坂道ですべって転倒 ・学生玄関ですべって転倒 ・玄関扉に足を挟む ・学生ロッカーで頭を打つ ・校舎内階段で転倒、落下 ・廊下で人とぶつかる 	<ul style="list-style-type: none"> ・体育中 <ul style="list-style-type: none"> バレーボールで突き指 捻挫 ・調理実習中 <ul style="list-style-type: none"> 包丁で手指を切る 熱傷 ・実習 <ul style="list-style-type: none"> レクリエーションで捻挫 介護実習で切傷 ・部活動 <ul style="list-style-type: none"> 膝を痛める 	<ul style="list-style-type: none"> ・机移動時手を挟む ・ガラスで指を切る ・紙で指を切る ・針で指を刺す ・バイト中のケガ ・自宅でのケガ ・巻き爪 ・リストカット ・靴ずれ ・爪が割れた ・耳垂の化膿（ピアス） ・カップラーメンのお湯で熱傷

図8 処置別利用数

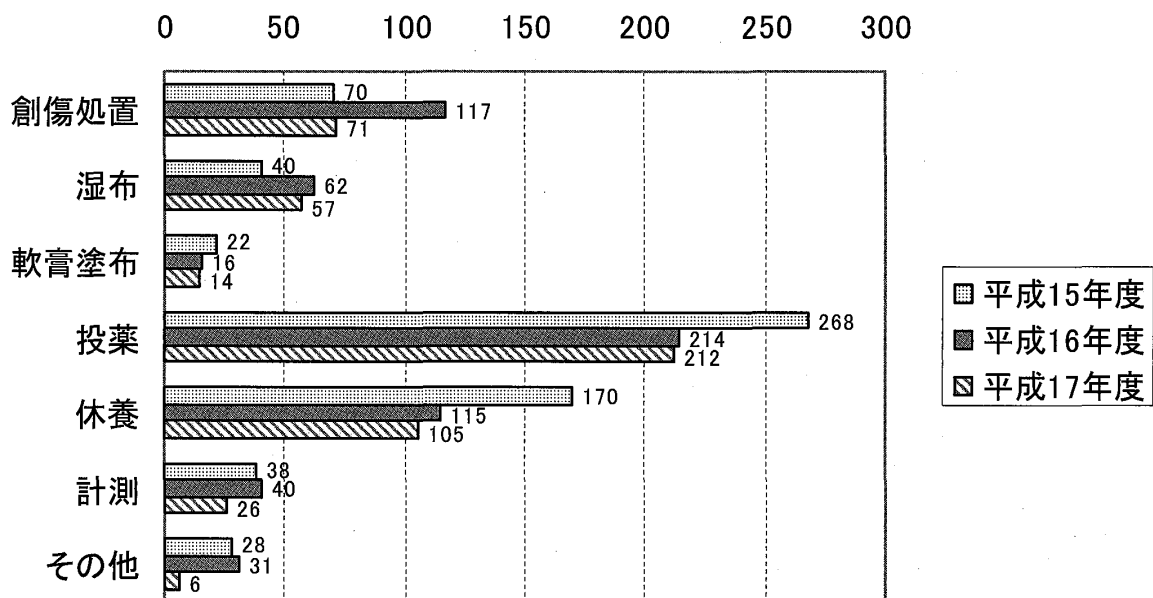
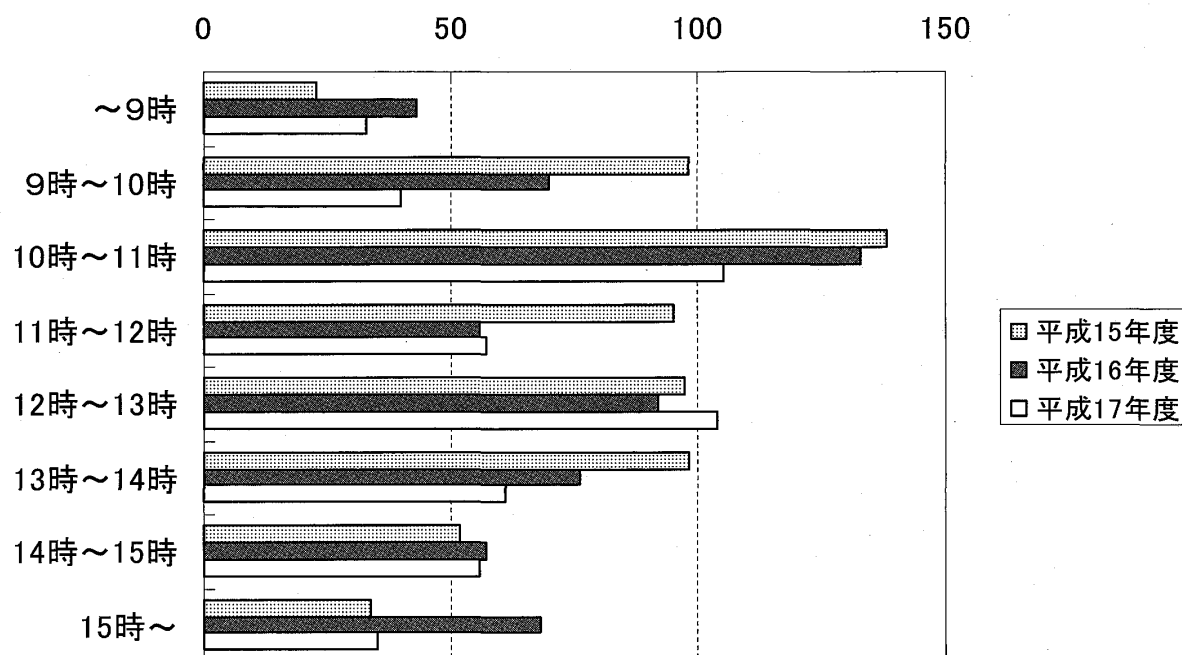


図9 時間帯別件数



4. まとめ

本学の保健室利用状況を保健室来室記録をもとに、平成15年度から平成17年度までの3年間にしぼってその実態についてまとめてみた。その結果は次の通りである。

- 1) 学生全体の4割が利用し、1年生が2年生を1割上回っている。また利用頻度から約半数が複数回利用している。
- 2) 月別では6月が最も利用が多く、季節別にみると春の5月から6月、秋の10月に多い。
- 3) 症状別では風邪様症状、生理痛、創傷、消化器症状の順で多いが、創傷と打撲・捻挫を合わせて外傷とした場合21%と一番多い。年度ごとにみても、症状の有訴率にはそれほど大きな傾向差はみられない。
- 4) 風邪様症状は4月と10月に多く、他の症状は6月に多い傾向にあった。
- 5) 外傷の原因には女子学生の特徴がでていた。
- 6) 利用時間帯で多いのは、10時から11時と昼休み時間帯である。

5. おわりに

今回の調査は、本学の保健室利用状況の実態を、身体的不調で来室した学生に焦点を当て行ったものである。しかし、この身体的な症状の中にはかなりの数で心因性のものと予測される。また、保健室での精神面の相談が多いことも確かであるが、それらに関する調査までには至らなかった。平成17年度より週2回ではあるが、臨床心理士による学生相談室が開室した。待っていたかのように学生は予約をとるため保健室に来室してきた。相談室の初年度の学生来室のべ数は181人であり、平成17年度の保健室来室数が減少しているのは、その影響が多分にあると推測される。日本学校保健会が調査した「保健室利用状況に関する調査報告書」(平成14年度

道 下 千 春

発行)によると1校1日当たりの小学校、中学校、高等学校合わせた全体の保健室平均利用数は36.3人で平成2年度の同調査より5.7人増加しているとし、小学校、中学校、高等学校とも学年が進むにつれ利用者が増え、男子よりも女子の方が利用が多いとある。また来室理由の背景には睡眠不足や睡眠リズムの乱れ、食習慣の乱れ、心の問題や精神疾患などがあると報告されている。今後も学生のもつ問題はさらに複雑化、深刻化を増すと考えられる。各短大・大学でもその対応策に迫られ、保健管理センターとしての機能拡大を図り保険診療の導入、各大学間での情報交換、健康管理の調査研究などが盛んに行われている。しかし、本学の保健室の実態は、他大学に対応できる機関としての充実がかなり遅れていると云わざるを得ない。学生の抱える問題とそのニーズに応えるべく十分な設備と人員の体制の見直しを急務と考える。当面の課題として、学生相談室の相談日の拡大、専門医との連携、教職員との理解度向上のための連携などに努力していきたいと考える。そして、小規模であるからこそできる個別的できめ細やかな対応を今後も大切にしていきたい。

引用・参考文献

- 1)「全国大学保健管理協会東海・北陸地方部会報告書」 2005年 p.28
- 2)「高岡短期大学保健管理センター活動報告書」 2005年 p.2-8
- 3) 千綿 節子ほか「保健室の利用状況からみた学生の健康状態」佐賀短期大学紀要 第30号 1999年 p.77-83
- 4) 菊池 裕子:「仙台白百合短大生の保健室利用の実態調査」仙台白百合短期大学紀要 No.20, 1992年 p.67-76
- 5) 大沢 雄二郎ほか:「群馬大学学生の外傷の実態調査」群馬大学保健管理センター紀要(3):1990年 p.7-14

注釈

- 注1) 保健室を来室した学生は、利用した期日と時間、氏名、症状名、行った処置、使用した薬品を記入することになっている。
- 注2) 大学保健管理協会とは、全国の大学保健管理の充実を目的として、昭和39年に設立された社団法人である。主な事業として全国大学保健管理研究集会の開催、地方部会活動(研修会など)、機関紙 CAMPUS HEALTH の発行などである。会員大学は413校、個人会員約200名である。筆者は個人会員である。
- 注3)「保健センター(保健室)利用状況について分類・集計の検討」の添付資料 各大学の保健センター紀要・年報(19件)での利用状況を今回の調査の集計と比較した。